

石を以て一面に蔽はれ、封土も略完全に保存せられる。この外、同名の神社は邑知院圓井・堀松庄宿女にもあつて、皆式社たることを主張してゐる。

シヒハツブラヒメジンジャ 椎葉圓比咩神社 羽咋郡圓井に鎮座する。當社の拜殿は、明治六年妙成寺の番神堂(今國寶)の拜殿を譲受けて移築したものであるが、修補せられた部分が多い。

シヒハライチダユウ 椎原市太夫 江戸の人。描金の技を清水源四郎に學び、正保の頃金澤に來た。加賀印籠中では、市太夫の製作したものが最も優秀といはれる。市太夫の長子藤藏家を襲いでまた市太夫といひ、次子友之進、三子市之丞共に良工であつた。

シヒハラカメノジヨウ 椎原龜之丞 金澤の蒔繪師で、龜命齋と號した。寛政・文化の頃の人。土佐派及び狩野派の畫を學び、終身無妻にして唯技術を樂しみ、その作多く金銀を用ひることなく、漆畫によつて妙趣を顯した。

シフ 詩賦 (一)加賀藩—前田綱紀の初期に至るまでの詩賦は、鎌倉・室町の詩偈の如く、徒に理を説き空に馳せて、幽情妙趣のその間に認むべきものがなかつた。小瀬道喜・松永昌三・平岩仙桂・澤田宗堅・奥村庸禮・奥村惠輝等皆これである。唯五十川剛伯のみは才學卓絶、その作清新にして雄健、實に一代の選たるに耻ぢない。在京の儒木下順庵も亦學問該博、その文を作り詩を賦する清麗雅健、唐調を鼓吹して一大革新を齎し、室鳩巢も之に學んで、詩賦の巧妙前後に多く比を見ざるに至つた。而して鳩巢の門に出て白眉であつ

た者を大地昌言とし、昌言の同窓小瀬良正の詩も亦絢爛、常に新井白石の推賞する所であつた。同時に伊藤祐之があつて文辭を能くし、嘗て韓客と應酬した時、彼をして一唱三嘆せしめたといふ。蓋し五十川剛伯・室鳩巢の後を承けて、赤轍を金城の詞壇に樹てたものは良正・祐之であつた。同時に國老本多政敏があり、詞藻富逸、努めて清素新尖の文字を用ひて奇巧を構へ、文政前後加賀藩の詩人が宋元の格調に走るの先驅を成した。寶曆の頃、深山安良は、莊典を尙はず、力めて瞻麗豊蔚、朱明の格調を襲踏した。一時藝苑の士之に靡き、詩風爲に再變した。又國卿横山隆達があり、器識朗高、詩賦老蒼、唐明二調に私淑し、常に詞人墨客をその乾々樓上に會し、

隆達自ら牛耳を執り、由美希賢・横山政禮・不破俊明・中西尙賢・乾祐直等、皆こゝに筆を載せて相蓋誓した。隆達歿して後詩盟を繼いだものに、澁谷亮・林翼等二三子があつて、晩唐の枯瘦と宋清の新工とを努めたが、この間に處して獨俗流に阿らず、盛唐の佳詞を標準とするものは富田景周であつた。景周の詩文、漫に典故を驅使し熟語を累積して博宏を銜ふの風はあるが、條理暢達、微を拆き細を穿つに至つては前後にその比を見ぬものであつた。大地昌言の裔孫惠齋大地文實も性瀟灑にして詩畫を好み、その江都に在るの日市川寬齋・大窪詩佛・菊池五山等と訂盟往來した。景周・文實の晩年は、明倫堂藩學の最も隆盛を極めた時代で、所謂儒者なるもの濟々として多士であつたが、詩賦文章の業は却りて往日に比して微々として振はず、纔かに一縷の命脈を維持するに過ぎなかつた。然るに文政

六・七年の頃から藩末に至るまで、作詩に熱中する大夫・士庶人俄然として輩出し、唱酬賡和虛日なく、所謂小集雅會なるもの相接續した。その作凡庸にして見るべきもの少かつたとはいへ、此くの如き機運を生むに至つた

所以は、實に大窪詩佛の鼓吹によつたのである。詩佛は文化・文政を頂點として、走夫兒童もその名を知らざることなき詩家であつたが、遂に詩行脚を思ひ立ち、文政四年江戸を發して、九月金澤に入り中村碧山の家に寓し、翌年春を以て歸つた。その間殆ど半歳、明倫堂文學には林瑜・渡邊栗・津田鳳卿・長井寬卿・陸原之淳・下村宗兵衛、大夫士人には横山政孝・柳原守典・岡島脩道等と共に吟咏に日を送つたが、何れも先生と尊稱し、富田景周すらその膝下に低頭した。今詩佛門下の主なるものを數へるに、多々羅西阜・龜田鶴山・野村空翠・伊藤半仙・村靜齋・錢田立齋・富田善我・中村碧山・富田鶴坡・木谷曉山・曾田菊潭・長崎浩齋・木村東亭・伊藤橘意・香林坊綠陰・谷川鷲齋・大井翔月・島野巴堂・森西園・井上素屏・松田丁夢・武藤鶴亭・僧痴王・九阜・玄天・聖澤等百數十人の多きに及んだ。同七年詩佛の再び金澤に來るや、主として野村空翠の家に身を寄せ、終に去つて裾を秋田藩に釋いた。而して詩佛が感化力の及んだ所、當時詩人の作何れも平淡無味に陥るを免れず、詩風爲に三變した。詩佛の勢力は、その去つた後も尙牢平として抜くべからず、遂に大島桃年をして、藩の教育が専ら經籍の訓詁にあるを以て、學生皆一編の小品文・一首の短詩すら作るの雅懷なきを慨し、天保八年意見を上つてその必要を説いたが、學頭は之を採用するの不可な

る所以を建言した。しかも、幾くもなく詩賦が藩學の科目として課せられるに至つたことは、藩末學士の詩集中に、明倫堂課題と註記したもの、往々存在するを以て之を知られる。當時奥村榮實・奥村惇叙相繼いで學校總奉行となり、經學の傍ら詩文を弄したが、その作偈偈見るに足らず、寺島鏡・上田耕亦學を好んで經濟の論に長じたが、詩賦はその本領でなかつた。その他藩末の奎運に貢獻した人は多いが、詩客文人と目すべきもの甚だ少

い。たゞこの間に立つて異彩を放つものには有磯千秋・藤範・玄軒永山政時二人があつたのみである。藤範は昌平齋に學んで最も詩賦に長じ、後藩の世嗣前田慶寧の師となり、政時は文辭富贍亦時流に一頭地を抜いた。更に越中の人凡山杏立が本藩に仕へるに至つては、胸中鬱勃の氣を發揮するに雄偉洗練の文字を以てし、自然を艶麗の筆底に驅使して、詩人の面目を躍如たらしめた。これ實に藩末の第一人者を以て推すべきものである。讎つて當時の來寓者にして、その影響を詩界に與へたものに、能登に探勝した頼山陽と、大聖寺に儒居した貫名苞とがあつた。共に居停の日多くはなかつたが、その感化を藝苑の一部に及ぼしたものがあらう。殊に萬延の頃、劉石秋が豊後から來て、金澤の醫師洲崎精の家に寓すること四月、その間菅茶山の詩によつて律詩の作法を講じた如きは、詩學に貢獻する所最も多大であつたらうが、下つて明治となり、經學と共に漢詩の流行一時に衰へ、僅かにその生涯の大部分を斯文に委ねた人士のみ、三五相會して文を作り詩を賦し、以て一時の鬱